

甲賀市の文化財①7

甲賀の民具

「民具」という言葉、あまり聞き慣れないかもしれませんが。広辞苑では「民衆の日常生活用具の総称」としています。市内の資料館や学校では、民具を保管、展示しています。では、なぜ民具を保管、展示する必要があるのでしょうか。

文化・自然へのとびら

高度経済成長の頃から、私たちの生活は大きく変わりました。農業は機械化し、必要な品物はスーパーマーケットで購入するようになりました。かつて、木の桶が壊れば桶屋さんに直してもらいましたが、現在はプラスチック製のバケツを購入し、壊れたら捨てます。このように、生活用品は、傷んだら修理をするよりも、常に新しい物を購入するという考え方に変化しました。また、同じ木製の桶を購入したいと思っても、市場には大量には出回らなくなり、桶屋さんもいなくなってしまうました。

このように、人々の生活様式の変化や、材質の変化によって、何世代にもわたり、繰り返し使用されてきた日用品は、大きく変化したのです。そして、新しい時代の中で使用されず、家に残った民具は、次第に捨てられるようになりました。

このように普通に使用してきた物が次々となくなつたため、その一部だけでも残し、次の世代に先人の知恵を引き継ごう、という考えから民具を収集し、その結果として保管・展示をしているのです。甲賀の主な生業は農業なので、市内に残された民具は自然と農具が多くなります。

昔は、稲の収穫が終わると、乾

田では田を掘り起こして麦や菜種などを植えました。

麦は11月に種をまき、寒い冬には霜柱や風で麦の根が浮くのを防ぐため、「地下足袋」などをはいて足で麦踏みをして、麦の根を丈夫にしました。春になるとフォーク状のスコップで麦の根元の土をすくって麦の株の中にふり込む「麦の土入れ」をします。土入れをすることによって、麦の株が広がり、中まで日光が届き、茎が丈夫になります。機械化される以前は、麦刈り後の脱穀や選別は、「ガークン（足踏み脱穀機）」や「トウミ」を使ったものです。

右の文中のカッコ内の民具で使ったことがあるもの、見覚えのあるものはいくつあるでしょうか。今後、転作物として麦の生産は続くでしょうが、機械化によって、このような風景はもう見られないと思います。

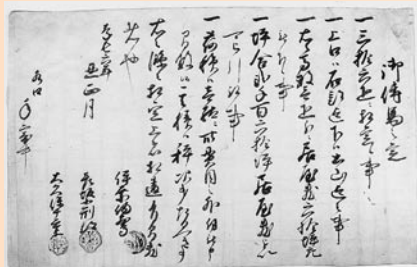
甲南ふれあいの館ではこれらの畑作の農具を集めた展示会を10月29日(日)まで開催していますのでぜひご覧ください。

【問い合わせ】
文化財保護課
☎ 86-8026
FAX 86-8380

「軍用道路」だった東海道

東海道は古代・中世を通じて都と東国を結ぶ幹線道路でしたが、今日東海道といえば徳川氏によって整備された「五街道」の一つである近世東海道をさすのが普通です。

近世の東海道の成立は慶長6年(1601)の正月に家康の伝馬朱印状と、御伝馬之定が宿駅となる町や村に与えられた時と考えられています。土山・水口の二宿もこの時宿駅に指定されており、水口宿の御伝馬之定が現存します。(水口宿文書)



△この1枚から宿場町が始まった

市史の小径

第15回

街道を歩く
その5

宿駅制度のかなめは公の輸送を円滑にするため、馬や人足を常備し宿ごとに継ぎ立てる伝馬制度にありました。これは前年の関ヶ原の合戦に勝利した家康が、本拠地江戸と朝廷や豊臣氏のいる京都や大坂との連絡を密にする必要から軍事的緊張のもとで制度化したもので、東海道は軍用道路、宿はその中継基地であったといえます。

街道の軍事的性格は、早くから家康の支配を受けていた土山が、文禄4年(1595)伝馬の飼料にあてるため、屋敷地年貢の免除を認められていることから察せられます。

(土山宿文書)土山が鈴鹿峠を控えた軍事上の要地であることへの評価ですが、この年秀吉側近の長束正家が水口の城主となったことの影響もあるかもしれません。徳川氏は物・人・情報の流通戦に早くから力を入れていたわけです。

東海道がこのような政治・軍事中心の道から、庶民の道へと変わるには、まだしばらく時間がいりました。

【問い合わせ】 総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380